

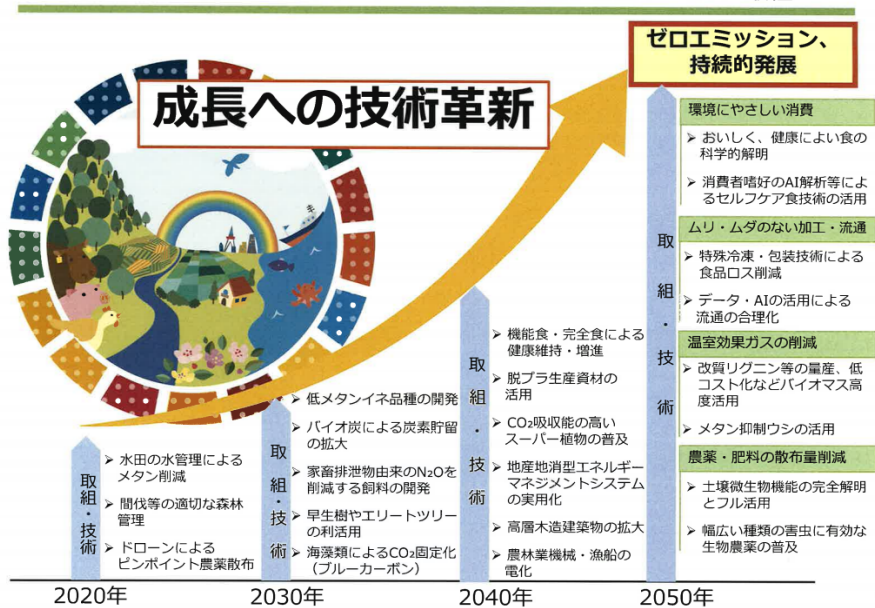
みどりの食料システム戦略 中間とりまとめ（案）

2050年度までに有機農業で100万ha作付目標、CO₂排出量をゼロ目標に

農水省は持続可能な食料システムの構築に向け、「みどりの食糧システム戦略」中間とりまとめ案を発表、5月までに戦略を策定する方針だ。生産から消費までの各段階の取組とカーボンニュートラル等の環境負荷軽減を農業分野で目指す。2050年までに目指す姿として農林水産業のCO₂ゼロミッション化の実現、肥料分野に係る項目は輸入原料や化石燃料を原料とした化学肥料の使用量を30%低減、国内耕作面積のうち25%となる100万ha分については有機農業を推進する壮大な計画となっている。経産省発表の2019年度生産動態統計年報化学工業編では化学肥料は約90.6万トンの出荷実績がある。この目標値からすると30年後には30%減の63万トンとなる計算となり、27万トンと言えば最大手肥料メーカー1社を超える年間生産量に匹敵する。技術開発目標として2040年までに革新的な技術・生産体系を順次開発、2050年までに社会実装を実現するという。化学肥料の使用量低減に向けた技術革新としては2020年代から10年間でドローンによるピンポイント施肥、作物の生育タイミングに合わせた肥効調節型肥料の高機能化、耕畜連携による環境負荷軽減技術の導入、有機農業の拡大が掲げられている2030年代から10年間はAI等を活用した土壌診断、安価で流通に適した有機資材（ペレット等）の開発・普及、J-クレジット制度（※）を活用した堆肥施用の推進があげられている。2040年代からの10年間では未利用資源からの高度肥料成分技術の確立、土壌・作物データを活用したスマート施肥システムの実現が掲げられ、2050年以降は土壌微生物機能の完全解明とフル活用による無肥料栽培の拡大及び画期的に肥料利用効率の良いスーパー品種の育種と普及による減肥栽培の拡大が記されている。2050年度の土壌微生物機能の完全解明化については研究のブレイクスルーを期待したいところだ。ただ、これが無窒素肥料で栽培できるなどとは現時点では想像がつかない。作物の必須要素である窒素肥料は、施肥した時点でもたらず環境負荷軽減は化学肥料であろうが、有機肥料であろうが畜糞堆肥であろうが生産者が使用し易い品質レベルの資材を生産する上では重油や電力を利用するため全くCO₂排出ゼロという訳にはいかない筈だ。窒素質肥料を施肥する行為において地球環境に全く負荷をかけないという農法は見出されていない。また、有機農産物の国内における栽培面積は2017年度時点では2万3,500haとされ、これを40倍にする目標となっている。諸外国では有機農産物の消費拡大が進んでいるという事から日本でも有機農産物生産を広げ、国内の需要喚起と輸出増につなげようとする発想はよいのだが、まず生産者が報われるような生産面の負担が対価として農産物価格に転嫁出来れば生産者も増えなくてもいいが、労働作業時間の低減や管理コストの軽減を掲げる方向性が強い昨

（次ページへ続く）

農林水産分野でのゼロエミッション達成と持続的発展に向けた取組



(前ページより続く)

今の生産者にとっては有機栽培が必ずしも受け入れられる環境下になっていない現状をどの様な形で生産者メリットにつなげる具体的な施策が出て来るのか興味深いところだ。30年後の国内農業の姿がどう変わっていくのか楽しみだ。

(※) J-クレジット制度とは

省エネ設備の導入や再生可能エネルギーの活用によるCO2等の排出削減量や、適切な森林管理によるCO2等の吸収量を、クレジットとして国が認証する制度。創出されたクレジットを活用することにより、低炭素投資を促進し、日本の温室効果ガス排出削減量の拡大につなげていく。

北海道は、でっかいどう！

東京では既にさくらが咲いたようだが北海道はまだ雪が残り春はまだ遠いようだ。さて、読者の皆様もご存知とは思いますが、北海道は全国有数の農畜産物の食料供給地域にて全国1位の生産量となるものが沢山ある。様々な農畜産物がある中で、昨今商品の値上げを耳にする事が多くなり始めた。各産地における天候問題、コロナ禍の影響による需給バランスの悪化や国際相場の上昇等要因は様々のようだが、砂糖や食用油、卵、じゃがいも等に留まらず、電気、ガソリンといった物にも及んでいる。価格上昇傾向にある数ある農産物で、北海道にゆかりの深いじゃがいもに目を向けてみると、価格が上がっている背景としては天候要因等による収穫量減、コロナ禍において不要不急の外出を控えた結果、保存しやすい食材が選ばれている事(需要増)、大雪(記録的な寒波)による物流の停滞等が影響として挙げられる。そんなじゃがいも(馬鈴薯)ですが、豆知識としてじゃがいもと呼ばれるようになった由来について皆さんはご存知ですか？。じゃがいもは17世紀の初めにインドネシアのジャカルタ(ジャガタラとも呼ばれていた)から日本へやってきた。ジャガタラいもと呼ばれていたものが、じゃがいもになったと言われている。じゃがいもは馬鈴薯とも呼ばれているが、中国から来た言葉で、江戸時代の学者である小野蘭山が命名したとされている。馬鈴薯という言葉の由来としては、じゃがいもの形が馬につける鈴に似ていたからという説や「マレーの芋」という意味からこの名前になったという説があるようだ。次に、令和元年における上位5道県の農業算出額を見てみると、全国では8兆9,387億円(100%)。1位北海道(1兆2,558億円:14%)、2位鹿児島(4,890億円:5%)、3位茨城県(4,302億円:5%)、4位千葉(3,859億円:4%)、5位宮崎(3,396億円:4%)となっている。北海道における農業算出額の内訳としては、畜産・酪農(乳牛・生乳・肉用牛・その他畜産物)で7,350億円(59%)、米1,254億円(10%)、野菜1,951億円(15%)、麦類・豆類・いも類・工芸農作物1,723億円(14%)、その他耕種279億円(2%)となっており、畜産・酪農で全体の約6割を占めるという構成だ。いかにも北海道は全国有数の食料供給地域であるというのが頷けよう。コロナ禍で思うように外出や旅行が出来ない状況が続いているが、状況が良くなった暁には是非この広大な北海道に足を運んで頂きたい。(札幌支店)

○北海道:収穫量全国1位の主な農産物

収穫量単位:トン

農産物名	全国		第1位:北海道		第2位		第3位		第4位		第5位				
	収穫量	収穫量	都府県	収穫量	都府県	収穫量	都府県	収穫量	都府県	収穫量	都府県	収穫量			
たまねぎ	1,155,000	717,400	62%	佐賀県	118,100	10%	兵庫県	96,400	8%	長崎県	29,200	3%	愛知県	27,600	2%
馬鈴薯	2,260,000	1,742,000	77%	鹿児島県	96,500	4%	長崎県	92,100	4%	茨城県	46,300	2%	千葉県	32,200	1%
てんさい	—	3,986,000	100%	—	—	0%	—	—	0%	—	—	0%	—	—	0%
小麦	1,037,000	677,700	65%	福岡県	68,900	7%	佐賀県	46,200	4%	愛知県	31,600	3%	三重県	23,000	2%
人参	574,700	164,200	29%	千葉県	109,400	19%	徳島県	48,700	8%	青森県	37,400	7%	長崎県	32,500	6%
小豆	42,100	39,200	93%	兵庫県	396	1%	岩手県	209	0%	栃木県	194	0%	京都	186	0%
大豆	211,300	82,300	39%	宮城県	16,100	8%	佐賀県	13,600	6%	福岡県	12,900	6%	秋田県	10,300	5%
かぼちゃ	159,300	65,500	41%	鹿児島県	8,510	5%	茨城県	7,960	5%	長野県	6,480	4%	宮崎県	4,820	3%
スイートコーン	217,600	83,600	38%	千葉県	17,100	8%	茨城県	15,000	7%	群馬県	11,200	5%	山梨県	8,480	4%
そば	42,600	19,700	46%	長野県	3,350	8%	山形県	2,580	6%	栃木県	2,340	5%	秋田県	2,070	5%
なたね	4,130	3,300	80%	青森県	380	9%	福島県	49	1%	滋賀県	44	1%	福岡県	44	1%

資料:農林水産省統計部 作物統計調査

たまねぎ、馬鈴薯、人参、やまのいも、大根、かぼちゃ、ブロッコリー、スイートコーン、小豆、大豆は平成30年産の値。それ以外は令和元年産の値。

首都圏の緊急事態宣言が解除されました。東京の桜も満開になりお花見に行きたいところですが、花より団子はもう少し我慢をして静かに桜を眺めるだけにしたいと思います。

編集事務局:南部、助川

電話:03-5275-5511/E-mail: macjournal@mcagri.co.jp URL http://www.mcagri.jp